

放送番組センター レポート

BROADCAST PROGRAMMING CENTER OF JAPAN Report

公益財団法人 放送番組センター

〒231-0021 横浜市中区日本大通 11 横浜情報文化センター
TEL.045-222-2881 FAX.045-641-2110 <http://www.bpcj.or.jp/>

福田俊男新会長 就任のご挨拶

6月15日開催の評議員会において、(公財)放送番組センターの新理事が選任された。会長には、村上光一氏の後任として、福田俊男理事が就任した。



このたび、公益財団法人放送番組センター会長に就任いたしました。

放送番組センターは、放送事業の健全な発達のために、放送界全体の共同事業として1968年に設立された非営利の団体です。主な事業は、国民的文化財の一つである放送番組を系統的に収集・保存し、一般に公開する「放送ライブラリー事業」で、放送法の指定を受けて実施する公的事業です。

放送は、教育、教養、報道、娯楽、スポーツなど、多くの分野を包含する総合メディアとして、人々の生活と密接に関わり合いながら、共に歩み発展してきました。放送番組は、作品そのものの価値に加え、それぞれの時代の社会、文化、生活、思想、民俗、言葉などを反映し、記録した文化資産です。

これらを集約的に保存し、後世に伝えていくことは、文化国家としての責務と言えます。保存された番組が、放送に関する研究のためだけでなく、各時代の歴史をたどる資料として活用されていくことは、放送文化のみならず、文化全体の発展に大きく貢献します。

1991年、放送番組センターは、放送界の支援と横浜市の協力で、わが国唯一の放送番組専門の公開施設「放送ライブラリー」を開設しました。2000年には、1929年竣工の歴史ある旧商工奨励館を保全・活用した横浜情報文化センター内に移転し、本格的にオープンしました。館内では、公開番組の視聴のほか、放送の歴史や仕組みについて学べる常設展示があり、また企画展や公開セミナー、番組上映会など、放送文化に対する一般の理解を促進する様々な催事を開催しています。

これまでに、全国の民放局、NHK、放送大学が制作したテレビ番組約25,000本、ラジオ番組約5,000本を収集・保存し、このうち約20,000本を無料で公開しています。また、テレビ・ラジオCMや劇場用ニュース映画も公開しており、公開番組の総数は約33,000本にのぼります。

近年力を入れている事業が、施設外での公開番組の利活用です。全国の図書館や博物館等の公共的な施設において、それぞれの地域ゆかりの人物・風物や、施設のテーマに沿った番組を視聴できる「サテライト・ライブラリー」や、大学の授業で番組を教材として利用できるサービスも行っています。また、公開番組の一部を民放局に限定して送信し、各社内のPCで番組の視聴ができる「クリエーター支援サービス」も行っています。これは、番組企画・制作の参考や、若手制作者の教育・研修に資することを目的としています。

放送界を取り巻く環境は、常に大きく変化しています。放送番組センターが担う責務を再認識し、時代に応じた事業展開で、未来の放送の糧となるべく励んでいく所存です。今後とも、放送ライブラリー事業へのご理解とご支援をお願い申し上げます。

◆略歴◆ テレビ朝日特別顧問。1947年、山口県出身。1970年日本教育テレビ（現テレビ朝日）入社。ニューヨーク支局長、メディア戦略室長、専務取締役。このほか、日本民間放送連盟専務理事、民間放送教育協会理事長、放送サービス高度化推進協会理事長等を歴任。2016年より放送番組センター理事。事業運営委員会委員、番組保存委員長を歴任。

■公開セミナー 制作者に聞く！ ドラマ10「トクサツガガガ」

2月15日、話題になった番組の制作スタッフから、制作の裏側を聞く公開セミナー「制作者に聞く！」を開催した。今回は、昨年NHKで放送され、“隠れオタク”の主人公の前向きに生きる姿が共感を呼び、また劇中特撮のクオリティの高さも評価され、ギャラクシー奨励賞などを受賞したドラマ10『トクサツガガガ』を取り上げた。

【ゲスト】吉永 証（制作）、末永 創（演出）
小野見知（演出）、西村 薫（美術）
【司会】ペリー荻野（コラムニスト）



丹羽庭氏の同名の漫画が原作の本作は、特撮の隠れオタクである主人公のOLの視点で、何かに情熱を持ったり熱中したりする人間の様子を、切なくもコミカルに描いた物語。近年は、特撮テレビ番組「スーパー戦隊シリーズ」（テレビ朝日）が若い女性の間でも注目を集めており、本作も大きな反響を呼んだ。

制作のきっかけについて、吉永氏が「自分は特に特撮に詳しいわけではないが、誰でも自分が好きなものを大事にしている。それを特撮好きの女の子に託して、様々な困難や楽しさを伝えられる。それがこの作品を作りたいと思った一番の理由」と話すと、末永氏は「気軽に見られるドラマにしたいとスタッフで話していた。ドラマ作りというのは、つい格好良いものを目指してしまう。今回はむしろ視聴者が、例えばポテトチップスを食べながら、あぐらをかきながら、少し上から目線で観てもらえるようなドラマにしたかった」と制作当初の思いを語った。また、吉永氏は「1話の放送後、ツイッターのトレンドランキングで世界一になっ

た。大河でも朝ドラでもない、この連続ドラマが1位になったと聞いて驚いた」と続けた。

この作品のドラマ化を提案したのは、若手ディレクターの小野氏。「友人に薦められて原作を読んだらとても面白く、すぐに企画書を書いた。視聴者が、特撮にこだわらず自分自身の好きなものに置き換え、主人公・叶（かの）の気持ちに共感できるドラマになるよう気をつけた」と振り返った。

このドラマは原作者・丹羽氏の初映像化作品だった。吉永氏が「丹羽さんは30代なので考え方若く人に近い。特撮というと、正義で物事を解決するストーリーを思い浮かべがちだが、丹羽さんはそうは考えていない。叶は良いこともするが、それはあくまで彼女が自分の世界を守りたいから。そこは原作の持っている大事な部分だったので、ドラマでも大切にした」と話すと、小野氏が「主人公が葛藤し困難を乗り越えるのがドラマのセオリー。だけど叶は、立ち向かうのではなく、どうすり抜けて折り合いをつけるかをひたすら探っている。そこがこの作品の魅力」と加えた。

人との距離感の描き方も大事にした。特撮オタク同士で近しい間柄になり、家の前まで届け物をしても、決して家の中に入ることはない。また、最終回では「友だち」という言葉を口に出すのを恥ずかしがるシーンがある。末永氏が「自分の記憶の中にあるドラマというのは、出会って仲良くなり、あからさまにお互いに分かりあっているという感じで話が展開するが、この作品は、微妙な距離感、例えるとSNSの知り合い同士のような距離感が

ある。放送時にも、ツイッターなどで『あいう感じがすごく分かる』という声が多かった。そういう関係を求めるのが今の時代の雰囲気なのではと思った」と話すと、小野氏が「あなたと私は違う。“違う”という距離感を保つつつ居心地よく生きるには、どうすれば良いか探りましょう」という話なので、ある種ドラマっぽくないドラマですね」と笑った。

主人公・叶役の小芝風花さんについて、吉永氏が「原作は小芝さんより少し年齢が高いが、コミカルな部分を意識して演じるのではなくて、“自然と一生懸命にやっているから可笑しい”という感じをよく出してくれた」と言うと、小野氏が「ご本人は何かのオタクになったことはないとおっしゃっていたが、『オタクとして好きな事を喋る時には、つい早口になってしまうと思う』とお話ししたら、すぐに掴んでくれた」と続けた。その他、ダミアン役の寺田心さん、吉田さん役の倉科カナさん、北代さん役の木南晴夏さん、任侠さん役の竹内まなぶさんなど絶妙なキャスティング、更にゴールデンボンバーの主題歌が魅力を一層引き上げた。



高い評価を得た特撮シーンについては、数多くの特撮ドラマを手掛ける東映の協力を得た。末永氏が「自分が視聴者だったら東映が作っているようなものを見たい。それを目指そうという思いから、協力が実現した。ただ、予算が本当に少ない番組で、更に時間も余裕がなかった」と振り返った。その厳しい状況で美術を任せられた西村氏が、会場のスクリーンに、マスク、スー、フィギュア等を映しながら制作過



程を解説した。漫画の二次元の線を立体にするのは難しいため、マスクの型は、まず左側を仕上げてから右側を作る。両方作ってしまうと、作り直しの場合全てを作り直さなければならないため、片側を先に作るのがプロの技という。さまざまな過程を経て、劇中の特撮ヒーロー・ジュウショウワンのスーツが完成するまで1か月位かかった。その後、フィギュアなど小道具として出てくる立体物を作るため、スーツを3Dスキャナーで撮影し、3Dプリンターで出力したものをベースに美術ス

タッフ総出で作成した。それらは、特撮オタクの“あるある”的な気持ちが随所に込められた叶の部屋に多数飾られた。その他、ポスター、食玩箱、書籍など、美術のこだわりが次々と紹介された。西村氏は「楽しかったが、もう少し時間が欲しかった。東映が協力してくれたので、すごい映像が出てくると思った。だから、こちらも手を抜けないというプレッシャーがあった」と当時の気持ちを語った。

特撮シーンの撮影の際、末永氏はスーツアクターの動きに感心したとい



う。「単純に様々な動きができるというよりも、格好良い仕草や身体の向きを表現できる」、また「高い所から飛び降りるなど、危険なアクションを行うが、自分たちの凄さを見せるためではなく、番組を見ている子供たちに喜んでもらうためにやっている。大事な精神だと思った」と続けた。放送時も、特撮シーンについて“NHKが本気でやっている”と話題になった。

視聴者の反響は大きく、「同じ思いで観ている人たちと同じ時間を共有できる場を作りたい」という思いから、最終回を視聴者と一緒に見る緊急のファンミーティングが行われた。300人の会場に、3000人を超える応募があったという。吉永氏は「この作品だったから、実現できたこと」と振り返った。

セミナー終了後、会場の参加者からは「制作者の作品への熱い思いが感じられた」等の声が多数寄せられた。

■世界の街道をゆく —10周年記念写真展—

2月27日～4月5日開催予定だった『世界の街道をゆく』(テレビ朝日)10周年記念写真展は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う臨時休館のため、2月28日までの二日間のみ開催した。この番組は、街道で会う人々の営みや自然の表情を、スチールとムービーを融合した新しい表現で映像化している。本展では、過去に旅した街道の中から、視聴者リクエストを元に選出した25の街道の写真を展示し、放送時の映像や10周年記念映像も上映した。同企画展は再開館後の7月10日から再開する予定。



■新型コロナウイルス感染症対策

新型コロナウイルス感染症拡大を受けて、放送ライブラリーは2月29日より臨時休館に入った。その後、緊急事態宣言の解除および神奈川県内の感染者数の減少等から総合的に判断し、6月11日より以下の制限付きで開館を再開した。

- 8階視聴ホールのみを開館
- 開館時間を10:30～16:00に短縮(通常は10:00～17:00)
- 混雑時の入館人数を制限
- コインロッカーは利用不可
- 団体(10名以上)での利用不可

再開館に当たっては、受付カウンターにアクリル製の飛沫対策用ボードを設置し、スタッフはマスク、フェイスシールド、手袋等を使用して接客することとした。また、視聴ブースは席数を減らし適切な間隔を確保する、同日中に同じブースを使用しない、接触部分は定期的に消毒する、館内を定期的に換気する等の対策を講じた。

併せて、来館者には以下の事項を依頼した。

- 入館時はマスク着用、および入館前の検温と手指消毒
 - 入館票への連絡先の記入
 - 視聴ブースの利用は2時間までとし、延長や同日中の再度の利用は不可
- 7月1日からは、開館時間を従来通りの10:00～17:00に戻した。この後、7月10日の企画展再開に合わせ、常設展の一部を除いて9階も開館する予定。今後も感染状況に応じ、柔軟に対応していくこととする。



■理事会・評議員会を書面により開催

【第1回理事会】

5月29日開催の第1回理事会で、令和元年度事業報告ならびに収支決算案、令和2年度定時評議員会の議案を承認した。また、理事を退任する村上光一氏ならびに堂元光氏に顧問を委嘱することを決定した。この他、更新作業中の番組視聴システムの状況や、新型コロナウイルス感染症への対応についての報告を了承した。

【定時評議員会】

6月15日開催の定時評議員会で、次期評議員7名と、次期役員22名を選任した。また、令和元年度事業報告ならびに決算報告を承認した。

【令和2～5年度評議員】

評議員長
濱田純一（前東京大学総長）

評議員

岩崎幸雄（岩崎学園名誉理事長）
亀渕昭信（元ニッポン放送社長）
河野尚行（元日本放送協会専務理事）
菅谷定彦（テレビ東京特別顧問）
菅谷 実（慶應義塾大学名誉教授）
藤井宏昭（森アーツセンター理事長）

【令和2・3年度役員】

会長

福田俊男

専務理事

斎藤信吾 [新任]

常務理事

松館 晃

理事

池端俊策（日本脚本アーカイブズ推進
コンソーシアム代表理事）

一本 哉（日本テレビ放送網取締役
常務執行役員）

今井通子（医学博士・登山家）

岡室美奈子（早稲田大学教授・

坪内博士記念演劇博物館館長）

小川晋一（フジテレビジョン

常務取締役）[新任]

音 好宏（上智大学教授）

河内一友（毎日放送相談役最高顧問）

喜早冬比古（ACC 専務理事） [新任]

仲尾雅至（TBSテレビ取締役） [新任]

中村行宏（テレビ神奈川取締役相談役）

波多野宏之（駿河台大学名誉教授）

福浦与一（全日本テレビ番組製作社
連盟理事長）

星崎雅代（横浜市経済局長） [新任]

正籬 聰（日本放送協会副会長）

松坂千尋（日本放送協会 専務理事
[新任]

若泉久朗（日本放送協会理事） [新任]

渡邊眞次（弁護士）

監事

松居 径（日本放送協会関連事業局長）

渡邊敬夫（公認会計士）

■ 2020.3～2020.5 の公開番組

【テレビ番組】

『考えるカラス～科学の考え方～ [1]』
2013.03.28／NHK
『フォーカス∞信州 カルビ
～人生が変わる美術室～』
2016.05.27／長野放送
『はりばて 腐敗議会と記者たちの攻防』
2016.12.30／チューリップテレビ

【ラジオ番組】

『生誕 90 周年記念特番
手塚治虫の伝言』
2018.12.27／文化放送
『SBC ラジオスペシャル
あ、あ、あ、あのね
～間違いだらけの吃音理解～』
2019.05.26／信越放送
『「白」よりか？「黒」よりか？
GLAY 白黒歌合戦！』
2018.12.29／ラジオ関西
など、テレビ 90 本、ラジオ 57 本。

新公開番組 PICK UP!

あなたと見た風景 ～目の見えない初江さんの 春夏秋冬～

2019.11.24／青森放送
演出：夏目浩光、制作：山本鷹賀春

青森放送のラジオ番組『RAB 耳の新聞』は、1978年から40年にわたり、視覚障害者自ら企画・取材・放送を手掛けてきた長寿番組である。パーソナリティの一人・内田初江さんは、78歳で30年務めた番組を引退し、現在は同じ視覚障害者である夫の利男さんと二人で暮らしている。番組では、利男さんとの出会いや育児での奮闘、盲導犬との外出、そして引退後の生活を四季と共に振り返る。

外出時は、盲導犬を伴っていてもバスとトラックの区別がつかなかったり、また

雪で点字ブロックが覆われると、近所でも迷ってしまうことがある。そのような状況を「音」を通じて追体験することで、視覚障害者へのサポートが機能していない現実を見落としていたことに気付かされる。

引退後のある日、初江さんは利男さんと通った喫茶店に久々に出かける。店内での二人の様子は、聞いている者にも懐かしい風景を思い起こさせるようだ。タイトルの「あなた」とは、初江さんの家族や番組を支えたスタッフ、そしてリスナーのことでもあるのかもしれない。

『RAB 耳の新聞』は、放送40年の成果が評価され、第45回放送文化基金賞(2019)を受賞した。放送ライブラリーでは7本の関連番組も公開しているので、ぜひお聞きいただきたい。

◆放送ライブラリー公開番組数

テレビ番組 17,249 本／ラジオ番組 4,621 本／テレビ・ラジオ CM 11,666 本／
劇場用ニュース映画 2,683 項目 (2020.6.30 現在)